

ワーズワスの『グラスミアの我が家』

吉 田 正 憲

序：未完成の大作の断片

ドイツ旅行から帰ったワーズワスとドロシーは、トム・ハッチンソン¹のソックバーンの農場に7ヶ月間滞在したが、1799年12月17日にそこを発ち、4日間の徒歩旅行の後でグラスミアのダヴ・コテッジに落ち着いた。そして翌年1月ワーズワスは、彼が計画したライフワーク『隠遁者』(*The Recluse*)の主題をミルトン調のblank・ヴァースで宣言する77行の詩を書き、更に3月から4月初めにかけて『グラスミアの我が家』(*Home at Grasmere*)の大部分を書き上げたが、1806年になって、彼は先に書いた77行の独立した詩行を拡大したものをその結論として付け加えて『隠遁者』第1部・第1巻と記した。その後彼は長編詩『逍遙』(*The Excursion*)出版(1814年)に際して、この結論部をライフワーク全体の概要を示す「内容見本」(*Prospectus*)として序文の中に引用したため、それ以後この詩行はその名で呼ばれるようになった。しかし『グラスミアの我が家』は作者の生前には出版されず原稿のままで残され、そのためこの作品は長い間独立した作品、或いはワーズワスが承認した正典としての扱いを受けず、未完の大作『隠遁者』の断片と見なされてきた。ディ・セリンコートとダービシャー編集のオックスフォード版『ワーズワス詩全集』において、この詩

¹後にワーズワスと結婚した Mary Hutchinsonの弟。Sockburn-on-Tees とハッチンソン家については Mary Moorman, *William Wordsworth: A Biography. The Early Years 1770-1803* (Oxford: Clarendon Press, 1957), pp. 436-8 参照。

は第5巻の付録として収められたが、最近この詩自体の価値が再認識され、また『隠遁者』の計画も見直されるようになったため、その一部として作者が位置づけたこの作品も改めて注目されることになった。²

この作品でワーズワスは、自分たち兄妹が住みついた湖水地方中心部の村グラスミアを地上の楽園と賛美し、その住民となった幸福感を述べている。しかしワーズワスの真の意図は、彼がコウルリッジと共に計画した哲学詩の大作の完成を目指すという決意の表明にあったと推測される。そのためにこそ彼はこの詩の最後に「内容見本」をつけて締めくくりとしたのである。大革命のさなかに約1年間フランスに滞在して革命の理想に共鳴するようになったワーズワスは、やむを得ぬ理由で帰国し、社会改革の理想の挫折を経験した後も、創作活動によってそれに代わる理想実現を目指した。英国南西部の田舎でコウルリッジとの親交によって英詩改革の情熱を共にしたワーズワスは、彼と別れて故郷の北国に定住することを決めてからも、『隠遁者』に専念するよう促すコウルリッジの勧告（併せて、人類の改善を忘れて個人的幸福の追求にふけることを裏切り行為と非難する彼の手紙）³を常に意識していた。従ってワーズワスはグラスミア定住を自分だけの幸福を求める隠棲、人生の活動の場からの逃避ではなく、積極的意味をもつ仕事への専念の証として自分自身に納得させ、また親友コウルリッジにも弁明する必要があったのである。

²Moorman, op. cit., pp. 482-6; Jonathan Wordsworth, *The Borders of Vision* (Oxford: Clarendon Press, 1982), pp. 114-48; Kenneth Johnston, *Wordsworth and 'The Recluse'* (Yale UP, 1984), pp. 88-91.

³S. T. Coleridge to W. Wordsworth, c. 10 Sept. 1799; *Collected Letters of S. T. Coleridge*, ed. E. L. Griggs (Oxford: Clarendon Press, 1956), i. 527; cf. J. Wordsworth, op. cit., p. 104: *Home at Grasmere by W. Wordsworth*, ed. Beth Darlington (Cornell UP & the Harvester Press, Ltd.), p. 5:

'... My dear Friend, I do entreat you go on with 'The Recluse;' and I wish you would write a poem, in blank verse, addressed to those, who, in consequence of the complete failure of the French Revolution, have thrown up all hopes of the amelioration of mankind, and are sinking into an almost epicurean selfishness, disguising the same under the soft titles of domestic attachment and contempt for visionary *philosophes*....'

第1章：地上の楽園の夢と実現

詩の冒頭でワーズワスは、少年時代にこの楽園を偶然発見した経緯と、その時の感動を語る。彼はホークスヘッドのグラマースクールの生徒だった頃、独り山中をさまよい歩いてこの谷間の縁に立った時、眼下に広がる人里離れた眺めに忽ち心打たれ、先を急ぐのも忘れて「ここに住みたい、この楽園でなら死んでもいい」とさえ思ったと言う。それは正に俗世間から切り離され、自由と幸福に満ちた田園の村落との出会いであり、後に彼が『湖水案内』(*Guide to the Lakes*)の中に共感をこめて引用したトマス・グレイの「この小さな思いがけぬ楽園」⁴ 発見の瞬間であった。そのとき以来この緑の谷間は、地上の楽園の原型として彼の懐かしい夢となり憧れとなった。それは彼にとって約束の地であったが、今や長い間の夢が叶って、彼はこの谷間を永住の地と定めたのだ。彼はピスガの山から約束の地を望み見たばかりでなく、実際そこに足を踏み入れる幸福を味わったモーセであった。⁵

ワーズワスはこの定住を意味深いものとするために、盲目的衝動に駆られて来たのではなく、理性の正しい判断に従って決断したのだと断言する。これは「自然」の承認を得た行動であり、彼らの決断は「自然」みずからによって祝福され激励されたのだ。約束の地を目指す彼らの旅は冬のさなかに行われ、そのため自然は厳しい顔を見せていたが、周囲のすべては旅する二人に祝福を授け、彼らの決意を励まし元気づけるように感じられた。

⁴*Wordsworth's Guide to the Lakes*, ed. Ernest de Selincourt (Oxford UP, 1906, rpt. 1982), p. 70. グレイの旅日記は Thomas West, *A Guide to the Lakes*, 3rd ed. 1784 (Woodstock Books, 1989) に Addenda III として収録されている。

⁵J. Wordsworth, op. cit., p. 115; M. H. Abrams, 'The Design of *The Prelude*: Wordsworth's Long Journey Home,' in *The Prelude 1799, 1805, 1850*, ed. J. Wordsworth, M. H. Abrams and Stephen Gill (W. W. Norton & Co., 1979), p. 595. Pisgah はモーセがその頂から約束の地カナーンを望み見たと言われる山。

彼は荒々しい顔をした自然の中にも、彼らの行動を暖かく見守る慈愛を感じ、自然と人間との間の共感を感じ取ったのである。従ってグラスミアは彼の決意に応えるだけの意味をもつ場所、つまり彼の魂の故郷であり、宇宙の中心でなければならなかった。

さらにワーズワスは、楽園に住む喜びが自分独りのものではないと強調する。彼の祝福された気分の源は、喜びを分かち合う仲間エマ⁶つまりドロシーの存在である。ワーズワスは両親の死後、長い間別れ別れに暮らしてきた妹と1794年春に再会し、翌年秋には英国南西部のレイスダウンに二人で居を構えたが、それ以来この妹の存在を自分の生活と仕事に不可欠な一部として考えてきた。レイスダウンとオールフォックスデンで彼女と過ごした3年ほどの田園生活は、フランス革命への熱中が彼に残した心の痛手を癒し、詩人としての仕事に自信を持つまでに回復させた。従ってドロシーは彼には絶対必要な共同生活者であり、また精神的生活を共にする者でもあった。彼は1798年7月「ティンタン・アベイ」でドロシーに呼びかけた言葉⁷以上の熱烈さで、彼女への愛を語る。

Mine eyes did ne'er

Rest on a lovely object, nor my mind
 Take pleasure in the midst of happy thoughts,
 But either she whom now I have, who now
 Divides with me this loved abode, was there
 Or not far off. Where'er my footsteps turned,
 Her voice was like a hidden bird that sang;

⁶ワーズワスは自作の詩の中でドロシーをEmma 或いは Emmelineと呼び、実名を用いなかった。cf. *It was an April Morning*, l. 39; *To a Butterfly*, l. 12; *Sparrow's Nest*, l. 9.

⁷*Tintern Abbey Lines*, ll. 115-59.

The thought of her was like a flash of light
 Or an unseen companionship, a breath
 Or fragrance independent of the wind
 In all my goings, in the new and old
 Of all my meditations—and in this
 Favorite of all, in this the most of all. (ll. 104–16)⁸

これはワーズワスが妹を讃えたどの記述にも勝る、もっとも熱烈な愛と賛美の言葉であり、恋する者の歓喜の歌とも思えるほどである。『グラスミアの我が家』は「その本来の衝動においてドロシーの歌であり、深く穏やかで、心から支えてくれる愛への感謝である」とジョナサン・ワーズワスは言うが、正しくその通りであろう。⁹

ドロシー以外にもワーズワスには強力な支持者たちがいた。先ず最初に船乗りの弟ジョンが、定住後間もない1月の終わりに新居を訪れて長く滞在した。彼は兄の神聖な使命を手助けするのが自分の任務と信じ、船乗りの仕事で十分な蓄えができた暁には兄と姉のために家を建て、自分のためにも一軒建てて、ここで共に暮らしたいと希望した。¹⁰ 兄弟の間のこうした連帯感は、彼らが早く孤児になったことで一層強められていた。またペンリス時代からの幼な友達メアリ・ハッチンソンも、2月の終わり頃ここに来て4月初めまで滞在し、絆の深さを意識させた。¹¹ そのうえ、親友の

⁸*Home at Grasmere* からの引用は J. Wordsworth, op. cit., Appendix (3) による。

⁹J. Wordsworth, op. cit., p. 118.

¹⁰Moorman, op. cit., p. 472. ジョン・ワーズワスについては拙論「ワーズワスの『人間化』について」(『法文論叢』第29号, 1971) 参照。

¹¹ハッチンソン家とワーズワス及びドロシーのペンリス時代以来のつながりについてはMoorman, op. cit., pp. 15–16, 77–79, 113–4などを参照。ワーズワスはメアリのことを若いころの幾つかの詩に描いた。cf. *Septimi Gades* (J. Wordsworth, op. cit., p. 426); *Beauty and Moonlight* (Moorman, op. cit., p. 58).

傍に住むためにわざわざ湖水地方に来て、北の町ケジックに住むコウルリッジもいた。オールフォックスデン時代の彼との親交は共同詩集『叙情歌謡集』(*Lyrical Ballads*)の出版となって実を結んだが、ここで彼らはかなりの距離にもかかわらず互いに訪ね合い、文学ばかりでなく様々な問題についても語り合い計画を練った。ワーズワスが目指す「哲学詩人」としての仕事完成させるためには、彼はなくてはならぬ存在であった。

しかしこの共同体の中心は、何と云ってもワーズワスとドロシーの二人であった。彼は楽園の住民となった自分と妹を新しいアダムとイヴになぞらえる。彼に与えられたものは、地上の人間として殆ど望み得ないほどの希望の実現であり、エデンの園の住人アダムでさえも得られなかった至上の幸福であると断言するが、タウン・エンドの薄暗い家での貧乏暮らしを考えれば、この愉悦感はいささか度を越したものと感じられなくもない。しかし今、貧しいながらも二人だけの安住の地を見出した彼らには、この家は大きな安堵感を味わわせるのに十分な意味を持っていたと思われる。

ところでこのアダムとイヴの喩えは、当然『楽園喪失』(*Paradise Lost*)を書いたミルトンとの連想を伴う。ワーズワスはこの頃しばしばミルトンを意識して、「内容見本」と同じ頃の作品「前置き」(*Preamble*)にも幾つかのミルトンを思わせる表現を用いているが、中でも特に‘The earth is all before me’の1行¹²は、追放されて楽園を去る二人の不安と期待に満ちた心境を伺わせるものである。しかし新しいアダムとイヴは今、地上の楽園に入ったのである。そしてこの楽園はグラスミアという現実の場所に定められているけれども、楽園が特定の場所ではなく実は心の持ち方の問題だと教えたのはミルトンであった。彼はアダムを慰める大天使ミカエルに次のように言わせている。

¹²*The Prelude* (1805), I. l. 15; cf. *Paradise Lost*, XII. l. 646. 引用は*The Poems of John Milton*, ed. John Carey and Alastair Fowler (Longmans, Green & Co. Ltd., 1968) による。

... then wilt thou not be loath
 To leave this Paradise, but shalt possess
 A paradise within thee, happier far.¹³

「内なる楽園」は、人間の祖先が失った神の楽園よりも遥かに幸福なものというミルトンの心理的解釈が、ワーズワスの楽園意識を知る上で重要な意味をもつのは言うまでもない。

しかしワーズワスが自分と妹をアダムとイヴに喩えるのは、ベイトソンが言いだした近親相姦の疑惑を強める可能性もある。¹⁴ ジョナサン・ワーズワスはこれを強く否定して、ワーズワスはバイロンではなく、普通の道徳観念の持主だったと弁護しているが。¹⁵

第2章：父祖の地への帰還

両親の早い死で故郷の家を失ったワーズワス兄妹には、強い家庭への願望があった。¹⁶ ドロシーとのレイスダウン、オールフォックスデンでの共同生活は、もちろん彼らに家庭を与えた。それはまたワーズワスの詩人としての成長に有意義な時期でもあったが、故郷に住まないという意味では彼の「放浪」の延長であった。だから彼らのグラスミア定住は、父祖の地の一角に住処を定めるという意義深い行為であり、失われた父祖の地とのつながりを取り戻すことであった。後年ドロシーは親友キャサリン・ク

¹³*Paradise Lost*, XII. ll. 585-7; cf. *ibid.*, XII. ll. 463-5, quoted by J. Wordsworth, *op. cit.*, p. 110.

¹⁴F. W. Bateson, *Wordsworth: A Re-interpretation* (Longmans, Green and Co., 1954, second ed. 1956), Ch. 5.

¹⁵J. Wordsworth, *op. cit.*, p. 426.

¹⁶Moorman, *op. cit.*, p. 471; F. B. Pinion, *A Wordsworth Companion* (Macmillan Press, 1984), p. 20.

ラクソン宛てに、次のように書き送っている。

We were young and healthy and had obtained an object long desired, we had returned to our native mountains, there to live; so we cared not for any annoyances that a little exertion on our parts would not speedily remove.¹⁷

同様の気持は弟ジョンにも見られる。彼は兄妹の中の二人が今この父祖の地で再び家庭を持ったことを誇りに思い、大いに喜んだ。¹⁸

それだけでなくワーズワスは旅の途中、故郷への帰還をいっそう意味深いものにする出来事に出会った。それは鹿跳びの泉でたまたま聞いた物語からの不思議な感動で、そのとき二人に訪れた神秘主義的ヴィジョン体験は、彼らの旅が特別な意味を持つことを啓示するかに思われた。彼らが農夫から聞いたのは、狩立てられた雄鹿が3歩の大跳躍をして谷を下り、生まれた泉のほとりで息絶えるという話だったが、それは彼らの故郷への旅の意味を思い出させるだけでなく、彼らの使命観ともつながりがあった。彼らが忘我の状態の中で見た、来るべきより穏やかな日の予兆は、鹿のむごい運命を聞いた悲しみを償い、彼らを元気づけてくれた。彼らはそこに酷い苦しみを与える人間性の幻影と共に、哀れな生き物への悲しみを表す「嘆きの神」「共に苦しむ神」(ll. 244-5)の存在を感じ取り、そのため彼らは、いま目指している新しい住まいで他の人達より早く与えられるはずの祝福を暗示されたと信じた。

¹⁷D. Wordsworth to Catherine Clarkson; Moorman, op. cit., p. 459.

¹⁸D. Wordsworth to Lady Beaumont, Nov. 29, 1805; *The Early Letters of William and Dorothy Wordsworth*, ed. E. de Selincourt (Oxford: Clarendon Press, 1935), pp. 545-6; Moorman, op. cit., p. 471; Stephen Gill, *William Wordsworth: A Life* (Oxford: Clarendon Press, 1989), p. 183.

... we found
 A promise and an earnest that we twain,
 A pair seceding from the common world,
 Might in that hallowed spot to which our steps
 Were tending, in that individual nook,
 Might even thus early for ourselves secure,
 And in the midst of these unhappy times,
 A portion of the blessedness which love
 And knowledge will, we trust, hereafter give
 To all the vales of earth and all mankind. (ll. 247-56)

ワーズワスはこの思い出を記念するためにバラッド「鹿跳びの泉」(*Hart-Leap Well*)を書いたが、そこには鹿の死を哀れむ「自然」の姿が描かれる。人間の無慈悲な行為によって殺された鹿を哀れむかのように、この辺り一帯は荒涼としていて、人間の奢りの印として建てられた領主の歓楽の館は今は朽ち果てて跡形もない。しかし自然の治癒力が次第にそれを元に戻し、再び緑ゆたかな森に返すことをこの詩は示している。ワーズワスはこの伝説の中に、人間の快樂や高慢を、いかに卑しくとも感情を持つ生き物の悲しみと混ぜ合わせてはならぬ、という教訓を読み取った。¹⁹ それはコウルリッジが『老水夫の唄』で示した神の慈悲と似かよったものであろう。²⁰

こうしてワーズワスは、彼ら兄妹のグラスミア移住を神聖な行為と受けとめ、この村を彼の中心主題と密接な関係をもつ重要な場所とする裏づけを得た。その意識をいっそう強く印象づけるために、彼はこの詩の中で 'bliss', 'joy', 'boon', 'surpassing grace' などの宗教的歡喜を表す用語を

¹⁹*Hart-Leap Well*, ll. 179-80.

²⁰Cf. Moorman, op. cit., p. 456; J. Wordsworth, op. cit., p. 120: 'a strange pantheist reconciling vision.'

用いているが、²¹ しかし実際にはこの定住は彼が言うほど前もって熟考された行為ではなく、彼の選択はかなり偶然に支配されていた。それにもかかわらず彼がそこに運命的な必然性を見たのは、彼の使命観に基づく解釈が作用していると見て差し支えあるまい。

第3章：楽園の諸条件

グラスミアを楽園とするのは先ずその自然条件であった。それは周囲の山々が保護者のように住民を優しく包み込む、閉ざされた世界であり、そこには多くの岩山と森、緑の島と曲がりくねった岸をもつ湖がある。山の石を積み上げて建てた教会と、周囲に点在する同じ石造りの農家がある。そこには絶えず流れる川、暖かい森や日の当たる丘、緑ゆたかな野原や山がある。牧場では牛や羊の群が草を食べ、茂みはさえざる小鳥に満ち、朝から夕方まで頭上高く舞う王侯然とした鳥の声²²が、地上を歩く人に向かって、大空にある孤独と沈黙とについて時おり勧告する。それは平和な農耕と牧羊の世界であり、古代人が夢想したアルカディアに似た地形である。サミュエル・ジョンソンは彼の哲学的小説の中で、アビシニア王子ラセラスの住む谷間をそのように描いた。²³

しかし単に美しい自然だけでは足りない。目に見える美しいものを越えた「ある一つの感覚」(l. 156) がここにはあり、それは彼の少年時代に心の中に入って来たもので、ここだけにしかない。尤もそれは場所そのもの

²¹Gill, op. cit., p. 180.

²²Cf. *Elegiac Verses in Memory of my Brother, John Wordsworth*, ll. 1-5: 'The Sheep-boy whistled loud, and lo! / That instant, startled by the shock, / The Buzzard mounted from the rock / Deliberate and slow: / Lord of the air, he took his flight; ...'

²³ワーズワスは『湖水案内』の中で Samuel Johnson, *The History of Rasselas, Prince of Abyssinia* に言及する (*Wordsworth's Guide to the Lakes*, pp. 48, 182)。cf. Gill, op. cit., p. 179.

に付いた固有のものではないかも知れない。なぜなら選ばれた精神の持主は何処へでも、それをここから持って行けるとワーズワスは言うのだから。それはいわく言い難い何物か——壮大と美と安息感、大地と空とが混じり合う神聖さ、この多数の人が住む小さな場所を終着点、最後の引退所、どこから来ても一つの中心、それ自体のために作られそれ自体で幸せな、依存や欠陥のない一つの全体、完全な満足、まったくき統一体とするものである。つまりそれはこの特定の場所を宇宙の生命の中心、精神の本来の源とし、それ自体で完成した充足の世界とする実感である。

... 'tis the sense

Of majesty and beauty and repose,
 A blended holiness of earth and sky,
 Something that makes this individual spot,
 This small abiding-place of many men,
 A termination and a last retreat,
 A centre, come from wheresoe'er you will,
 A whole without dependence or defect,
 Made for itself and happy in itself,
 Perfect contentment, unity entire. (ll. 161-70)

ワーズワス兄妹はここで自由を味わい、神聖と真実の気持を養いながら生きる積もりで、知りうる限り最も気高い神殿を選ぼうとする。そして人間の精神と、自然が内部に持つすべてのものを高める力を信じて、この決心をしたと言う。気まぐれからではなく、手の届く所にある助力を手に入れるのが賢明だと思ったからだ。そして決して卑しくはない種類の助力を彼はここに見出した。この壮大な自足の世界、自然がすべてである場所では、

他のどこにもまして単一の目的、強い愛、他の獲物を目指すのではなく精神の内部の獲物に憧れる野心——つまり彼が目指す詩人の仕事がふさわしいと彼は思う。それは永遠と神とに思いを致す心であり、最高の野心であるとも彼は言う。日常の仕事において、それは感覚と精神との絶え間ない楽しみのための調和と優雅さ、魂の写し絵、永遠と神との住処となろう。それは詩人としての新しい創造の可能性の追求である。そして少なくともこの場所には、現実世界の汚濁や邪悪な汚れは侵入してこないように見える。それは素朴な農民と羊飼たちの住む世界——『湖水案内』に描かれた「羊飼たちと農耕者との完全な共和国」²⁴——であり、周囲で進行している社会の急激な産業化からは完全に切り離されている。

このようなエトスの強調には、先に述べたように楽園を特定の場所ではなく心の持ち方だとするミルトンの影響が明らかに見られる。神の国の実現を目指して共和国建設の政治的行動に加わり、挫折して『楽園喪失』を書いたミルトンには、楽園を精神の世界に求め内面的なものとするのに十分な理由があった。ワーズワスにとってもまたグラスミアは、アルカディア的美しさ以上にそのエトスが重要であった。なぜなら彼も楽園を外の世界に求めるのを諦めて精神の内部に探り、その極意を他の人々に伝えることを目指したのだから。「内なる楽園」は彼ひとりの個人的所有物ではなく、他の人々にも伝えられる救済の原理でなければならなかった。

それはともかく、このように湖水地方を理想化する傾向はワーズワス以前から既にあった。トマス・グレイは湖水地方を旅したときの日記の中で、特にグラスミアを「小さな思いがけぬ楽園」として紹介した。それは当時の画家たちが描く牧歌的風景画の主題ともなった。彼らはグラスミアを描くとき、周囲を丘陵に囲まれ、中央に水清らかな湖水を抱く平和な村落として描くことを好んだ。ウェストの『湖水案内』の口絵として選ばれた銅

²⁴Ibid., p. 67.

版画²⁵は正しくそうした構図であった。それはフィンクの言う「山間の谷の牧歌」²⁶の典型的構図であり、「ウェルギリウスの・ホラティウスの・トムソンの主題を湖水地方に局地化したもの」に他ならなかった。この牧歌的生活と気前のよさの理想化は主にボロウデイルについて言われ、トマス・ウェストはグレイのボロウデイル賛美を踏襲し、ギルピンもグレイに倣ってこの谷間と住民を叙情的に賛美した。だがこのような賛美は決してそこだけに留まらなかった。グレイに倣ってウェストは更にそれを拡大し、グレインジの若い農夫についてグレイが言ったことはこの山岳地帯一般にまさしく当てはまると言明した。

しかしこのように田園を理想化する地誌的著作家たちも、この牧歌世界が決して完全な楽園ではないことを知っていた。ギルピンはこの土地で働く羊飼が冬に直面する多くの危険や事故に注目し、しばしば風吹きすさぶ山の斜面で羊の世話をせねばならないこと、雪が降るときには羊の群を救うために自分の命を危険にさらすような状況も起こると言った。ワーズワスが『序曲』(*The Prelude*) 第8巻や「マイケル」の中でそのような問題にも触れたのはよく知られている。更に彼らは農民たちの素朴な美德が、外の世界からの旅行者や邪悪な影響力によって損なわれることを恐れた。このような楽園思想の影響はワーズワスの詩に多く見られるが、それが最も顕著に現れるのは『湖水案内』においてであるとフィンクは述べている。

第4章：春の訪れと水鳥の飛翔

ワーズワス兄妹がグラスミアに来たのは冬のさなかで、それ以後2ヶ月

²⁵ウッドストック版 *West, A Guide to the Lakes* 参照。ただし第6版(1796)年ではこの絵は「ロドアの滝」と差し替えられて別の場所(p. 80と p. 81の間)に移された。

²⁶以下の記述は *Z. S. Fink, The Early Wordsworthian Milieu* (Oxford: Clarendon Press, 1958), pp. 67-70による。

の間、自然はなおも厳しい試練を積み重ね、彼らがこの谷間の住民にふさわしいか否かを試した。しかし彼らは厳しい試練に耐えて、自分たちが自然の導きに忠実であることを証明し、この美しい谷間の愛を得るようになった。彼らは今や谷間の住民として受け入れられ、調和ある世界の一部となることを認められたと信じるのである。

さて厳しい冬の嵐は和らぎ、春の訪れが感じられる季節になった。さまざまな鳥たちは、すでに春の気配を感じとって楽しんでいる。中でも水辺の鳥たちは生き返り、住まいである湖の上を群を成して自由自在に飛翔する。その飛行は一見気まぐれのようなようだが、まるで大宇宙の秩序と調和を象徴するかのような「調和と壮大な舞踏」(ll. 291-2)である。「幸せな中でもより幸せな者」(l. 287)と自負する詩人も、空を見上げて彼らの楽しみを羨ましく眺めるばかりである。

Behold them, how they shape

Orb after orb their course still round and round

Above the area of the lake, their own

Adopted region, girding it about

In wanton repetition, yet therewith—

With that large circle evermore renewed—

Hundreds of curves and circlets, high and low,

Backwards and forwards, progress intricate,

As if one spirit was in all and swayed

Their indefatigable flight. (ll. 292-301)

この飛翔を描くワーズワスの言葉には、明らかにミルトンの叙事詩にある天使たちの飛行が意識されている。²⁷ それは湖水地方の別の場所でワーズ

²⁷Cf. *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. E. de Selincourt (Oxford: Clarendon Press, 1952), ii. p. 522.

ワズ兄妹が見たという水仙²⁸の踊りに似て、宇宙の調和を象徴する舞踏を思わせる。この水鳥の飛翔は少し違った形で後に『湖水案内』にも引用されるが、²⁹ それは待ちに待った春の訪れの告知であり、彼ら兄妹への自然の愛の証なのである。

しかしその鳥たちの中で、二羽の白鳥が今日の楽しみを共にしていないのに彼は気づく。ワズワズ兄妹はこの白鳥のつがい自分たちの存在を象徴するもの、同じ運命につながる者という意識で眺めていた。彼らも兄妹と同様ここを自分の住処と選び、平和と孤独の中に生きるためにやって来たからだ。ワズワズは彼らの不在に二つの可能性を見る。この谷間の住人である羊飼がその一羽を鉄砲で撃ち殺したか、あるいは二羽とも同時に殺してしまったのか（こちらの方が白鳥たちには慈悲深い死と言えようと彼は考えるが）。ここには確かに、深く愛し合う者たちを死が引き裂くという発想がある。幻の乙女ルーシーを死が奪い去ったように。³⁰ それは妹への彼の強い愛情を暗示する想像とも言えよう。しかし彼らの楽園生活を象徴する白鳥たちが谷間の住民の手にかかって死んだとなると、ことは穏やかではない。ワズワズが理想化するグラスミアの田園社会は、その根拠を失いかねないからだ。なぜ彼は敢えてこのような想像をするのか。

ワズワズの湖水地方の提示には必然的に理想化が伴うが、現実はずしも美しいものばかりではなかった。矛盾がさまざまな形で侵入する。その一つがこの白鳥についての悪い想像である。もちろん彼はこれを単なる空想として打ち消そうとする。こういう想像に耽ること自体が、愛する谷間とその住民たちへの冒瀆となるからだ。彼はこの神聖な場所の住民は、当然のことながら聖別されていなければならぬと考える。彼らは既に祝福されているから、よそ者が彼らに祝福を与える必要はない。彼らには平和

²⁸Cf. *I wandered lonely as a cloud.*

²⁹*Wordsworth's Guide to the Lakes*, p. 37.

³⁰Cf. 'Lucy' Poems.

があり、目に見えるあらゆるものへの溢れるほどの愛があると言う。しかし彼は現実がそうだと言うのではなく、むしろ在るべき姿を述べているように見える。彼が無意識に漏らすようにそれは 'Must needs... be' (l. 367) なのである。そこで詩人はそのような忌まわしい考えを打ち消して、目に見える美しい谷間の風景に慰めを見出す。

第5章：谷間の生活と羊飼たち

ワーズワスは真実を直視するのを避けたり、ロマンチックな期待をもってここに来たのではない、そうした空しい希望は今日の喜びの原因の一部ではないと言う。確かに或る不思議な声が山や野原から聞こえるのを彼は散歩の途中しばしば聞いた。それは自らの声に答えるのを喜ぶ鳥の声か、森で独り狩りをする猟犬の吠え声のように繰り返された。この「天の導き」を暗示する声をジョナサン・ワーズワスは、酔った羊飼の冒涇の叫びを表そうとする詩人の諧謔気分のせいだと言う。³¹ 詩人は山国に育って土地の事情をよく知っているので、羊飼を理想化したりせず、人並みの悪徳をもつ普通の人と見ようとしている。それにもかかわらず、ここの住民たちは先祖伝来の家と自ら耕す畑と牧野を持ち、健全な自由人で、極端な貧窮に悩まされず、相互扶助の精神をもつ自主独立の民であり、そのために低地の人たちよりもすぐれた基本的徳性を保持していると彼は確信する。これは彼が少年時代に見て憧れたあの羊飼、『序曲』第8巻に現れる理想的人間像の原型と同じである。だが今や成人してその住民となったワーズワスは、大人の目で冷静に彼らを観察しているように見える。

こうした一般論の後でワーズワスは、谷間の住民たちの生活の実態を具体的に検証する。幸福そうに見えても思わぬ不幸に見まわれる「学者」と

³¹J. Wordsworth, op. cit., p. 125.

呼ばれた羊飼の話もあり、また妻を亡くしても娘達に囲まれて楽しく暮らす幸福者もいる。或いは夫と共に植えた樅の林についての思い出をしみじみと語る未亡人の物語もある。こういう感動を人に伝えるのが自分の使命だとワーズワスは信じる。彼らは静かに「山の聖域」(l. 685)の中で暮らしており、彼は新参者ながらその立派な証拠を既に見たのだから。

ワーズワスの人間への関心と愛情は、同じ谷間に住む動物たち——体の麻痺した男を乗せる小さな茸毛の馬、石切場で負傷した人が乗るロバ、この谷で一番有名な牧羊犬、有名ではない盲導犬など——にも及ぶ。また冬の田舎家の寂しさを慰めるコマドリやミソサザイ、春になれば訪れるはずのツグミやその他多くの歌鳥たちにもそれは向けられる。居なくなったヘルヴェリンの鷺のつがい³²が元の巣に戻るのを彼は願い、フクロウ岩³³の名前の元になったフクロウにも友達になりたいと思う。その他に、自然の中で同様に幸せに暮らしている野性の生き物たちもいる。ワーズワスは水鳥たちの飛翔を前に描いたが、来るべき愛の日に勧告を受けて、心地よい調和の不思議な調べで日当たりのよい大気を満たす鳥もいると言う。³⁴

そこで彼は大胆に宣言する。このような様々な愛の対象とともに住む者は決して孤独ではない。たとえ多数の人が住む都会にいても、そこに愛の対象がなければその人こそ孤独である。³⁵ 多くの者が一つに結び合った高貴な組織体、それは父権の支配下にあり、身分の高い者も低い者も、神の下で平等な一つの家族を作る。それは世間から隔てられた彼ら自身の立法の府であり、社であり、輝かしい住居である。³⁶ そこでワーズワスは人の

³²Cf. *Wordsworth's Guide to the Lakes*, p. 17.

³³Owlet-cragとはワーズワスの創作した名前ではないかとセリンコートは言う。*The Poetical Works of W. Wordsworth*, ed. E. de Selincourt and H. Darbishire (Oxford: Clarendon Press, 1959), v. p. 479.

³⁴Cf. *Fidelity*, ll. 27-8.

³⁵Cf. *Paradise Lost*, IX. ll. 249-50: 'For solitude sometimes is best society, / And short retirement urges sweet return.'

³⁶Cf. *Wordsworth's Guide to the Lakes*, pp. 67-8.

憧れをかき立てるアルカディアの夢も、太古の、或いは遠い未来の黄金時代の空想もすべて捨て去り、現実を冷静に見つめるようにと勧める。自然は愛するこの谷間も決して例外とせず、その恐るべき権利を極限まで押し付けて、必然的な苦痛の貢ぎ物を強要していること、人間自らが常に自らを苦しめ、苦痛を更に増していることを認めよと言う。

しかしそれを慰めるのに十分な希望が一つだけある。この深い谷間がいかに善く、いかに美しく、いかに清らかであるかを考えてみれば良い。更にまたこの谷間の住人が、住処に相応しい人々であることも分かるだろう。たとえそれがなくても、将来にわたって喜びと希望を与えるものを彼らは自分の中に持っている。それは美しく平穏な家庭であるが、既にそれは心から愛する「我らが父の家の異邦人」(l. 865) によって豊かにされている。この「休むことなき海の巡礼」(l. 866)³⁷ は今この家でしばしの休息を楽しんでいるのだ。それに「我らが心の姉妹たち」(l. 869)³⁸ も訪ねて来てくれるだろう。更にまた「我らが心の兄弟」「哲学者にして詩人」コウルリッジもいる。彼を見ればこの山々も喜びで沸き立つだろう。この平和の谷間は、神の御心によってこれほど恵まれているのだ。ワーズワスはこのようにドロシーと暮らす家庭の幸せと、彼らを支える精神的共同体の存在を再確認する。

しかしワーズワスは楽しい暮らしに満足してはいけなさと知っている。彼は自分の内部に自分だけの所有物、最も愛しい身近な人も共有できない或る貴重なものがあると信じ、それを人に与え、未来の世界に不滅のものとして広げたいと願う。

³⁷John Wordsworth は9月29日に出発した。F. B. Pinion, *A Wordsworth Chronology* (Macmillan Press, 1988), p. 40.

³⁸ハッチンソン家の姉妹の中ではメアリの他にセアラ(Sara)、ジョアンナ(Joanna)がワーズワス兄妹と親しかった。

Possessions have I, wholly, solely mine,
 Something within, which yet is shared by none—
 Not even the nearest to me and most dear—
 Something which power and effort may impart.
 I would impart it; I would spread it wide,
 Immortal in the world which is to come. (ll. 897–902)

そして彼は一方では自分の中に行動に憧れる素質があることを認めるけれども、しかし自然の命ずるままに、戦士たちの勇敢な行為や英雄的な歌をうたう希望に別れを告げ、いよいよ最後に、本来の仕事に専念することを明らかにするための宣言を行う。この詩の終結部に置かれた、哲学詩『隠遁者』全体の趣旨を述べる「内容見本」がそれである。

第6章：華麗な結尾

そこでワーズワスは「人間と自然と人間生活について孤独の中で考えていると、時折り甘美な情熱が音楽のように私の魂を通り過ぎていくのを感じる」(ll. 959–62)³⁹と語り出し、それらの思いに調べ美しい歌で表現を与えたいとの願いを述べる。これ以下の詩行では楽園が日常の創造によって得られること、それを実現する力は、人間の精神と自然との不思議な適合によって可能なイマジネーションであることが強調される。彼は真理と荘大と美と愛と希望——この世と墓のかなたの希望——徳と精神的な能力、悲嘆の中にある祝福された慰め、広く大衆の中に広がる歓喜、侵されぬ隠棲を続け無限の存在、一つの大きいなる生命と調和する個人の精神について歌うと宣言し、「少数ながら、ふさわしい聞き手が見つかるように」

³⁹J. Wordsworth は 'Prospectus' を 'the inspired sequence of Miltonic verse' (op. cit., p. 108)と呼ぶ。

(fit audience let me find, though few!—l. 972)と願う。これが『樂園喪失』からの引用⁴⁰であるのは言うまでもないが、この行を含む叙事詩的主題の提示にせよ、その言葉遣いにせよ、そこには先輩詩人ミルトンへの対抗意識が明らかに読み取れる。彼はミルトンが祈願した詩神ユレイニア、或いはそれ以上の詩神からの導きを期待する。なぜなら彼はミルトンのセイタンのように暗く深い奈落に下り、また最高の天が単なる覆いでしかないような世界で呼吸しなければならないからだ。すべての恐るべき神々、エホバの神とその武器の雷、声高く歌う天使たちの合唱隊と最高天の座天使たちも、彼は恐れることなく通り過ぎる。⁴¹ もっとも深い地獄の暗黒の奈落、混沌も、夜も、夢の助けで掬い出された虚空の世界も、人間の精神——これこそ彼の歌の主要な領域なのだが——を覗き込むときしばしば襲う恐れと畏怖を生み出すことはない、と彼は断言する。

The darkest pit

Of the profoundest hell, chaos, night,
 Nor aught of blinder vacancy scooped out
 By help of dreams, can breed such fear and awe
 As fall upon us often when we look
 Into our minds, into the mind of man,
 My haunt, and the main region of my song. (ll. 984–90)

人間の想像が描き出す理想の形を遥かに超える自然界の美も彼に仕え、日常の隣人としてかたわらに住む。樂園もエリシュームの森も幸福の島も、人間の精神と外界とが愛で結びつけば、それらは日常の産物になる。だか

⁴⁰*Paradise Lost*, VII. l. 31.

⁴¹ブレイク(William Blake)はこのような考えに反撥したが、しかし実際にはワーズワスに近い面があると J. Wordsworth は指摘する (op. cit., p. 109)。

ら彼はこの幸福な時が訪れるずっと前に、この両者の結びつきを歌うという、未だかつてない主題の祝婚歌を孤独の中で歌うのだ。

I, long before the blessed hour arrives,
Would sing in solitude the spousal verse
Of this great consummation, would proclaim . . .
How exquisitely the individual Mind
 . . . to the external world
Is fitted; and how exquisitely too—
Theme this but little heard of among men—
The external world is fitted to the mind;
And the creation (by no lower name
Can it be called) which they with blended might
Accomplish: this is my great argument. (ll. 1002-14)

この宣言でワーズワスは、彼の優れた主題である「自然と人間の精神との相互適合」の産物が、これまでにない彼独自のものになるはずだと自負しているのである。

しかしそのような厳粛な主題を離れて人間の問題を扱い、怒りをぶつけ合う激情の光景を眺めたり、ひとり淋しく苦悩を歌う人の声を聞いたり、都会に常に閉じ込められた人々の激しい悲しみの嵐に心に向けることになっても、意気阻喪し希望を失うことがないようにと彼は願う。そして最後に詩神への祈願の代わりに、予言の霊である「人間の魂」(l. 1026)「偉大な詩人たちの心の中に高き社をもつ広い大地の人間の霊」(ll. 1027-29)に向かって、私を導き、本来のものと偶発的なもの、決まったものと束の間のもものを見分ける技を教え給えと祈る。更にまた、この大いなる幻影を見

た東の間の存在物である人間が何物であるかを知り、その喜び、悲しみ、希望と恐れ、彼のすべての人生の小さな現実を記述することを望む。また命と息吹、道であり案内者、力であり理解力である偉大なる神に向かって、私の命がより良き時代の姿を現すように、より賢明な欲望と素朴な習俗が私の心を真の自由の中で養い、すべての清純な思いが私と共にあって最後まで私を支えてくれるようにと祈る。この高揚した調子の願いでワーズワスは『グラスミアの我が家』を歌い終える。

結び：作品評価の視点

長く憧れた自然の楽園への定住を祝う歓喜の序曲で始まり、父祖の地への帰還という第2の主題で補強されて、最後に唳々と鳴り響くファンファーレにも似た「内容見本」で結ばれる『グラスミアの我が家』を読めば、1篇のロマン派的交響詩を聞き終えたような感動を読者は味わうかもしれない。途中で顔を覗かせた暗い想像も、最後の楽天的な終結部を導き出すために克服されるべき苦悩の断片であるかのように忘れられてしまう。従ってそれを成功作と認める次のような評言も一応当然と納得できよう。

Wordsworth was approaching that synthesis of the homely, the prophetic, and the contemplative spirit which made possible the work of the next eight years.⁴²

ワーズワスはこの詩で自然の楽園に住む幸福感を歌い、その楽園で自分の本来の仕事に専念する決意を述べて終わりとした。彼の生涯のコンテクストから離れて、独立した作品として見れば、それは一つの中心主題の展開

⁴²Moorman, op. cit., p. 485.

として完結していると言えよう。生まれ故郷であり、また天職に専念できる魂の故郷でもある自然の楽園に帰ることで、彼は一つの完成したパターンを作り上げたのである。1年ほど前に書き終えられた『序曲』が、失われた少年時代の自然の楽園への復帰と「自然の預言者」⁴³としての自覚を述べ、そこで達成された詩的才能の開花を祝うというパターンを描いているように。

しかしワーズワスの諸作品が実生活と深いかかわりをもつ以上、この作品を彼の生活と重ね合わせたいという誘惑を、我々は無下に退けることはできない。「内容見本」そのものが、実際に書かれた1800年初めの楽観的気分を反映したものであることは言うまでもないが、それが1806年になって『グラスミアの我が家』の結尾とされたことは一体何を意味するのか。こういう疑問をもつのは、1805年2月5日に起こったジョン・ワーズワス船長の海難による突然の死を我々が知っているからである。愛する弟の死はワーズワスの人生観を根本までゆさぶり、自然の信仰からの方向転換を彼に余儀なくさせるに至った。しかし彼はそれに敢えて挑戦するかのようになり、その直後の5月には自叙伝詩『序曲』を希望と歓喜の調子で歌い終え、更に約1年後には『グラスミアの我が家』を同じように希望に満ちた楽観的な調子で締めくくっている。しかも彼が「内容見本」をその結論として採用し、その詩全体を『隠遁者』第1部・第1巻と位置づけたことは、大作に取り組む準備が今や整い、今後の活動に責任を負うと宣言していることになる。彼は人生の重大な危機に直面しても、なお逆境に挫けないように自分自身を励まし、目標の大作に向かう決意を示したかったのであろう。

それだけでなくワーズワスは、1814年になってもなお『逍遙』の序文の中で、先に『グラスミアの我が家』の結論部とした107行の詩篇をライフワークの「内容見本」として掲げた。彼がコウルリッジと共に計画した『隠

⁴³*The Prelude* (1805), XIII. 1. 442.

遁者』の巨大な仕事は、簡単に下ろすことができない表看板だったのである。彼が実際にその完成を諦めたのは、68歳の誕生日を過ぎたころであった。⁴⁴

1999. 1. 27. 受理

⁴⁴J. Wordsworth, *op. cit.*, p. 376.